

蚕ってなあに？育ててみよう 岡崎市島坂保育園（愛知県岡崎市）

保育士の思い 蚕との出会いを体験する2・3歳児の驚き、発見、感じ方をありのままに受け止め、生物に興味・関心を持つようにしたい。5歳児は自分の蚕の世話をし、疑問に思ったり、確かめたり、感じたことを保育士や子ども同士で伝え合ったりして、学びの育ちに繋がるようにしたいと考えた。

蚕ってなあに？ 育ててみよう

蚕ってかわいいね。（5歳児）

- ・一人5匹ずつ飼ってみよう。
- ・繭は夜できるのかな？（事例）
- ・樹齢百年の桑の木を見に行こう。
- ・繭の花作りをしよう。

緑の蚕と茶色の蚕がいるよ？

（4歳児）

- ・みんなで蚕を育てよう。
- ・何になるのかな？（スズメ蛾の幼虫）

やけどしちゃうから、触っちゃあ いけないだよね（2・3歳児）

- ・なんかびりびりって、音がするね。
- ・おじいちゃん、おばあちゃんから話を聞こう。

< 5歳児事例 > 7月11日 蚕の繭作り（広告紙の箱にしきりを入れたものに移す）

子どもの活動	・保育士のかかわり 子どもの思いや考え
<ul style="list-style-type: none"> ・M「口から糸を出してるんだよ。」 ・Hは薄くてできてきた繭の中の蚕を見て、「鼻が動いてるよ」 ・M「最初は糸を壁に付けてくよ。」糸が行き来する様子を身体で表現する。 ・H「糸がベタベタするからくつつく・・・」 ・A「15分かな？」 ・T「夜できるんじゃない？」 <p>・「うすくまあるくなってるよ」</p> <p>・「夜出来るのかな？」</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・「蚕ってどうやって繭を作っていくのかな？」と繭作りを始めた蚕に目が向けられるようにする。繭作りをよく見よう  <p>どのくらいかかるのかな？</p> <ul style="list-style-type: none"> ・蚕がどれくらいで繭を完成させられるものなのか？子どもたちと予想をする。（11時30分） ・「みんながご飯食べてる間にできるかな？おやつ時には出来るかな？」と経過を感じやすい(子どもが捉えやすい)時間を上げてみる。 ・おやつ時に、再びさっきの蚕を見えるようにする。 ・「明日の朝どうなっているかね」(期待をもたせ楽しみに待つ)
<p><翌日></p> <ul style="list-style-type: none"> ・9時頃登園してきたR「繭が出来てる！」とびっくりしたように言う。A「ぼくが来た時出来たから8時30分だよ」 ・まだしっかり繭になっていないのを指さし「これはどうするの？」葉をあげた方がいいのかどうか迷っている様子。 ・解ったような解らないような顔をしているが葉をあげるのは止める。作りかけの繭を触り「ちょっとやわらかい...」しっかり出来ている繭を触ると「かたい...」と保育士の顔を見て話す。 	<ul style="list-style-type: none"> ・昨日の繭がどうなっているか聞いてみる。繭が出来てる！すごい！感動！繭が出来るまで短い時間ではなく長い時間がかかるのではないかという思いはもっている。 ・「朝になったら出来たんだね。みんなが寝てる間に作ったのかな？...」 ・「蚕、繭の中にいるんだよねどうやって葉を食べるのかな...」 ・保育士も一緒に触り「ほんとだ。繭って出来ると硬くなるんだね...」とHに共感する。 ・繭の中に入ってしまった蚕に対して、まだ生きてるものとして葉を食べるのが当然という認識があるのか。繭の中に入ってしまった蚕には葉をあげなくてもいいということと結びつかない。 

< 4歳児事例 > 7月5日 みんなで蚕の観察をする

蚕を飼育するにあたり注意すること「濡れた手で触らない、素手で触らない」を子どもに知らせ、「蚕は何を食べるか知ってる？」と、問いかける。子「知ってるよ！桑の葉しか食べないんだよ」子「えーだって前のすみれさん（5歳児）が言ってたもん」保「すごい。何でも知ってるね」子「後ねえ、柔らかい葉っぱしか食べないんだよ。だってまだ赤ちゃんだもん。赤ちゃんは歯がないもん。だから硬い葉は食べられないんだよ。私みたいになったら硬いのがって食べられるんだもん！」

昨年の5歳児の姿を見て知識とし、受け継がれていることを感じる。蚕を自分に置き換えて話している。



7月6日 地域の方に教えてもらう

子「蚕さん、桑の葉をカサカサって音を出して食べるんだね。」子「蚕さんのお家をきれいにかわいくしてあげたい。絵を描いてもいい？」(自分達で飼うことになり愛着も湧き関心をもつ)

夏祭りに参加している地域高齢者の方から話を聞く。A「おじいちゃんの子どもの頃、木で作った箱の中に蚕を入れ沢山飼ってたんだよ。島坂地域もほとんどいたよ。カサカサ・・・すごく物音を立てて食べるんだよ。懐かしいなあ」子「えーそんなにたくさんだとカサカサうるさいね」「うんちもたくさんするね」B「私も昔飼ってたけどどうもかわいいとは思えなくてねー」子「おばあちゃん気持ち悪くないよ。蚕さんはステキな糸を出してくれるんだよ。おにいちゃんの卒園式の花（コサージュ）も蚕さんの繭だもん」

7月17日 緑の蚕と茶色の蚕がいるよ？(スズメ蛾の幼虫)

Y「先生！！葉っぱに変な虫がいる」K「緑の蚕と茶色の蚕じゃないの??」Y「違うよ！蚕は白だから・・・何かの幼虫だ！」K「先生、箱ちょうだい」Y「手だと怖いから蚕の割り箸使って取っていい！！」捕まえる。保「なんていう虫かなあ？」興味を持つように言葉を掛ける。N「本で調べればいいじゃん」なんだろう？という好奇心も湧き自分達で調べようとする。(以前より積極的な姿)この虫と蚕の変化が見られるように机に2つ用意した。Y「葉っぱ食べる食べ方蚕と同じだ！」「葉っぱ食べたらうんちした」「蚕よりうんちでかい！」K「この葉(落ち葉)食べるかな？」首を振るよう拒否する。「えーっ、食べない」Y「さっきいたとこの葉っぱ食べるんじゃない」Y「朝顔の葉にいたから朝顔の葉っぱが好きなんだよ」K、N「ぼくは大きい葉っぱ(あじさい)をあげてみる。N「蚕と一緒に柔らかい葉を食べるんじゃない」(蚕の世話の実体験から)子どもが気付いた葉をあげると朝顔の葉を食べた。図鑑で調べたがよくわからないので飼うことにする。

7月19日幼虫の色が少しずつ黒くなっていく。

「かおにつのがあるよ」「なんか、プップーのラツパみたい」

7月21日幼虫が黒くなり小さくなる。2匹ともさなぎになる。

(茶色)K「さなぎは寝てるからもう、ご飯はいらないんだよ」

8月7日1匹のさなぎが蛾になる。K「調べよう。何の名前か」「スズメ蛾の・・・エビガラスズメかな」「似てるね」「蚕より細長い羽」K「つのは出てくるときにじゃまでんーんととったんじゃない??」「何のご飯食べるんだろう」K「チョウチョになったら蜜を吸うんだよ。朝顔の葉が好きだったから朝顔の花あげようーっと」A「チョウチョかわいそう」保「どうしてかな?」「だってお母さんが探しているかもしれないから」保「どうしたらいい!」子「逃がしてあげよう」みんなで話し合い逃がすことにする。



「さなぎ、もう死んでしまったかな」というときに蛾になり(約2週間)蚕と比較(色、形等)しながら観察をすることが出来た。生き物を飼育するにつれ、子ども達の中に知識も増え、また観察(見る)力も以前より鋭くなってきている。自分達で話し合っ「さくらちゃん」と名前を付けるなど、生き物に対して愛着が湧く。蚕とスズメ蛾の成長過程が実際に比較して見る事が出来、似ていることに気付いた。

<3歳児事例> 6月28日 蚕との出会い

7月 2日 保育者と一緒に世話をしてみよう

<実践事例集 vol.5 12頁 「A-2 葉っぱもって食べるのじょうずだね!」 参照>

<2歳児事例> 7月10日 蚕と初めて出会う 蚕ってなーに?

蚕を初めて目にする子。蚕の箱を子どもが見える高さにし置く。箱の中に興味を示し覗き込む。口々に思ったことを言う。子「見る見る!!」保「蚕さん元気かな?」子「動いてる!」「もぐもぐしてる!」「何食べとるの?」見たことを言葉にする。保「蚕さんは葉っぱが好きなんだって」「おいしいおいしいって食べてるね」子「うん、おいしいおいしいだっ!」保「新しい葉っぱをあげようね」葉をどんどん入れながら、子「はーいどうぞ!」「はっぱだよ」「ブタさんみたいだねー」子「コロコロなに?」糞を見つけたようである。保「蚕さんのうんちだよ。いっぱい葉っぱを食べたもんね」子「うん」子「Nちゃんもうんちでるよ」「Mちゃんもー」と自分と同じことに気付く。

蚕を見ることを通し「食べ物を食べ、糞をする」という行為に、2歳児が自分と同じということに気付いたと考える。蚕が葉を食べるところを身近に見ることで何かな?と不思議に思ったり、感じたり、気持ち(心)が揺れたと思う。すると、感じたことを言葉にし、表現をする。「ブタさんみたいだねー」と蚕の顔や雰囲気を感じたと思う。面白い発想になる。恐がる子もいるかもしれないが、出来れば触れてみるともっと感じ方に広がりが出たのではないかと反省をする。

【考察】3歳の時から、毎年育てている蚕は、5歳児にとって身近な存在であり、かわいさを感じている子が多い。子どもなりに責任をもち、世話をし、成長の変化に喜びを感じ、生き物を大切に思う気持ちの芽生えに繋がって行くのだと思う。また、友達同士、世話の仕方、変化の様子を伝え合ったり、一緒に観察することを楽しんだり、個別の経験ではなく回りの友達とかかわり合いをもてる体験となった。初めて蚕と出会った2・3歳児は「これなーに?」から始まり、心が揺れ、よく見るようになり、好奇心が旺盛になっていくことも実践を通し分かった。5歳児の姿から、蚕との出会いを積み重ねてきたことが「学び」(観察力、疑問を深める力)の育ちに繋がってきていると感じた。

みどころ

子どもの年齢や実態に応じた身近な生き物を、飼育物として環境に設定することは大切です。この事例のように、毎年子どもたちが熱心に飼育することで、園の特徴的な存在になる飼育物は、幼児同士で伝え合う姿が自然に引き出されます。こうした飼育物は、望ましい環境やかかわり方のモデルがあるので、年齢によるかかわりの違いを子どもたちの中でも自然に受け止め、保育者にとってもそれぞれの発達や課題を捉える環境になります。